

演題：「安心して悲しむことのできる社会へ」
(平成 26 年 6 月 13 日 清水 康之 先生)

「いのち」を考えること、それは直接的な意味の「死」を考えることでもあると思います。いつか来る「死」があるからこそ、それまでの「生」をいかに精一杯生きるのか、人間誰もが興味を持たざるを得ない主題かもしれません。しかし、社会にはその人がもともと与えられているであろう寿命まで精一杯生きることを拒否する、いわば「自殺」という形が存在します。そういった「自殺」についていかに清水講師が向き合っているのか非常に興味がありました。

清水講師のお話を伺って、私自身がまず驚いたことは、「日本の自殺者数」のその「多さ」です。そういった話は、これまでどこかで耳にする機会があったとは思いますが、今回いただいた資料や、そのお話から詳しくその状況を知りえたのは初めてでした。

- ・「年間にすると 3 万人弱、1 日に 75 人が自らの命を絶っている。」
- ・「東京マラソンの参加者は約 3 万人。日本で 1 年間に自殺で亡くなる人とほぼ同数。」

こんなに多くの人々が自らの命を絶っているとは一体どういうことなのでしょう。自分自身が住んでいる国のこととして、本当に暗鬱な気持ちになってしまいました。清水講師によると、日本の自殺者数は 1998 年（1997 年度末決算期）から急増しているとのことであり、そこには社会経済的な問題（不景気による会社の倒産等）が密接に関係していることや、40～60 代の男性（父親世代）が全体の 4 割を占めることなどのお話がありました。自らをかえりみれば、そういった世代条件に当てはまっていることや、これまでの人生で、決して「自殺」というものに無関係ではなく、知人等を含めて周囲でそういったことが起きていたことなどを思い合わせれば、決して他人事とは思いませんでした。

そういった自殺による「自死遺族」の問題。父親をなくした青年が精一杯前向きに生きている姿を今回の講座で見聞きし、強い感動を覚えました。

身内、ましてや自分の肉親が自殺したとき、そのとき自分自身ならどうなるのか、どういった精神状態になるのか。自分に置き換えて様々に考えさせられました。「自殺の問題は個人の問題ではない。社会の問題である。」清水講師のお考えはまさにその通りだと思います。自分には関係のない話として捉えるのではなく、社会の構成員である私自身もその問題に実は関係しているのだということをしかりと受け止め、そのうえで何があっても前向きに心豊かに生きる大切さを教えていただいたと思いました。